

死んだら神となる

人間が死んだ場合は「仏になる」という。沖縄では、「神になる」「神仏かみぶつになる」などというように、必ず神という言葉を入れている。

神は普通不可視のものである。ところが、死んだ当座の人間は未だ肉がついている。肉が付いている間は、魂は未だ肉にしばられ、完全な神には成り切っていない。肉からはすれた後において、すなわち肉体が完全に腐れ去った時において、初めて完全な神となるとの思想があったようである。

こうして、肉体から去った、目に見えない魂こそが祖先の神化したものであって、後に残った骸骨はたんなる罨いの抜け殻に等しいもの、石屑と同じものであった。ある一定の場所に放った後はなんらかえり見ることもない。次々と死人を放って行き、そこに散乱している骨も何びどのものであるかと考えて見ることもすらなかつたようである。

そういう状態であったものが、どうして骨を崇拝するようになったのであろうか。

それについては種々の理由が考えられるはずであるが、おそらく、魂を対象として拝するにしても、何かそこに魂を象徴する目に見えるものを設ける必要があったということであろう。骨は、それを拝することによって心理的満足感を充たすものとなってきたのである。キリスト教における十字架や、仏教においては仏像を考え出したというのも、そういうことに関係するのではなからうか。

神となっている祖先の魂を拝する場合、かつてその祖先の魂のよりどころとしていたその人骨を通して拝してこそ、拝することの満足感が起こることは自然なことではなからうか。

祖先の魂を対象として拝するには、祖先のかつての姿そのものが望ましいのではあろうが、しよせんそれは不可能なことであり、目に見えるものとしては骨以外に残らないことを考えると、そこに人骨崇拝や、墓所崇拝が起こったことは自然の成り行きであるといえるであろう。

骨に魂が憑よっているとの思想からであろう。沖縄では祖先神の骨を「骨神かみかみ」といい、または「精神しんじん」とも称している。

それでは、死んだ人はいつ頃から神に成ると沖縄の古代人は思っていたのであろうか。死ぬと同時に、それとも死後何日が経過して後においてであろうか。

民俗・習慣が急激に変化してきた現在において、このことを究めようとするところが困難であることは当然であるが、あえてわずかに残る習俗から推測してみたいと思う。

津堅島は案外古風を残している島の一つであるが、そこでは死人を後生山あきまに連れて行き、六日

間は墓参に通う。その後は墓参することなく過ごし、四十九日目に家において祝いの祭礼を行ない、翌年の七夕に村中いっせいに洗骨行事が行なわれる。そしてそれ以後は墓参することもなく祭礼も行なわれない。

宮古の池間島では、沖縄戦以前までは、「死んだら神となる」との思想があった。参葬者が野辺送りをすませて帰路につく際には、一人一人をケーン(ススキ)で御敵いをするのであるが、その際に「あなたは神とられました。よってこの人たちを悪魔からお守り下さい」と言いながら御敵いをするという。

葬儀が済んだら翌日からは誰も墓参する者はいない。九日目に親類縁者が家で祭りをするのみで、それ以後は何一つ祭礼を行なわない。

池間島では、死ぬと同時に完全な神に成るのではなくして、最初は「神人」になるのだという。それが九十日目に「ミツガカンナイビョーイ」(三カ月が神成り日)といて、真の神にはこの日から成るのだという。この日に家で祝いの祭礼が行なわれるという。

大正の初めまでは洗骨の風習もなく、位牌というものも昭和二年から、また命日祭りもその頃からはじまったとのことである。

沖縄本島の村では、三十三年までは仏で、その年忌が済めば神と成るといっている。これはおそらく仏教の影響と考えられる。わずかな材料ではあるが、それらの中から仏教的要素を除いた真のものと祭りがわかれまいだろうか。

来間島・池間島での、野辺送り以後は墓参もなく、洗骨風習もなかったというようなことは、

古代一般的なことではなかったらうか。奄美大島の枝手久島は付近村落の死者を舟で運んで来て放った島だと聞いている。

この習俗は、野辺送りが済んだ死者は神と成る、あるいは死ねばただちに神と成る、ということを示しているものと思われる。沖縄本島では、三十三年忌が済めば神と成る、したがってそれ以後は何もする必要はない、といっている。墓参も祭礼も洗骨もしないということは、神に成ったからには何もしないでよいということと一致する。

野辺送り後数日の墓参は愛慕からの習俗か、甦りを考慮してのものかはわからないが、そのいずれに起因するとしても、その期間中は死者を覗いて次第に面相の変わり果てていくのを見ているわけであり、古事記の黄泉國の記事を思い出す。

ところで神は目に見えるものではない。野辺送りのみでその後一切構わないという習俗の場合には、この世から消え去って目に見えなくなったことから、死ぬと同時に神と成るという観念が存在していたはずである。

一方、墓参りをして死人を覗き見るということであれば、この世に未だ姿を見せているということであり、したがって未だ完全な神とは成っていないという観念なのであろう。筆者は一九六一年、津堅島で当時八十六歳の老女から、「昔は死んで六、七日で神と成った」ということを聞いている。おそらく死人の面相が生前の状態で見分けがつかなくなる日数を経験上から知ることによって、この日から彼はこの世から見えなくなった、言い換えれば神と成ったと考えるようになったのかも知れない。

しかし、数日の経過では未だ故人は肉体が残っていてこの世と通じている。このことは未だ完全な神に成っているとは言えないことになる。いままで面相の変わる日、すなわち九日目に神と成ると考えていた池間島も、経験を重ねた結果として、完全に肉体が消失するのが九十日とするようになった。六日目頃から完全な神と成ると思っていた津堅島も四十九日目へと変化したのではないかと考えられる。言葉を換えて言うならば、肉体が消失したことをもって完全な神と化するという思想へと変化したものと思われる。洗骨の際に腫肉の部分が見える場合、「この人は、未だこの世に想いが残っている」と語った古老の言葉を思い起こす。

これを要するに、第一段階としては、死んだ人は野辺送りを済ました日から神と成る。

第二段階は、死者の面相が生前の姿と見分けがつかなくなった時からで、津堅島の六日目、池間島の九日目に当たる。

第三段階は、完全に腐肉したと考えられる時からである。池間島の九十日、津堅島の四十九日目もこの概念が入っていると思われる。

第四段階が、現在多いところの三十三年忌が済んでから、ということになる。

想えば古代人は短時日のうちに神となることができたようである。文明の進んでいるといわれている現在では、三十三年も経たなければ神と成ることができなくなってしまった。その三十三年といっても、子孫の長い供養の援助を蒙らねば不可能のようである。

沖繩における洗骨という行事の起源も、今までの魂崇拝を具象化するに最適なものとして、その人の骨をもつてするようになってからはなからうかと思われる。

死霊

死霊とは何か？ 研究者の多くは柳田国男と同じく、「死者の霊」と解しているように思われる。とするならば、「死霊」とは、人々のこのうえない恐怖的になっている「死をもたらし悪霊」ということになるが、こうした考えはそのまま受け入れてよいものであろうか。

伊波普猷の著『沖繩女性史』に次のような記事がある。「彼等（古代沖繩人）は来世は暗黒な所で、死人は穢らわしい者と悪つてゐた」と。

柳田国男もその著『葬制の沿革について』の中で、「我々の祖先の死霊に対する畏怖戒懐は、今よりも遙かに甚だしいものがあつた」と述べている。柳田の死霊は、死をもたらし悪霊の意ではなくして、死者の霊と解されるのであるが、伊波の古代沖繩人、また柳田の「我々の祖先」なる者を原始社会時代の人と解した場合、果たして当時の死人は穢らわしい者、畏怖されていた者と考えられていたかは疑問が持たれる。

たしかに現在の人は死人を畏怖し、これに触れることも好まないし、死者の眠っている墓地に行くことすら厭っている。沖繩においては各家門口に灰をまき、死者のあった家や葬送から帰った際には塩で穢れを清める仕草をする。

と言って、これら一連の行為をもつて、「死者の霊」を怖れ敵っていると考えてよいのだろうか。

著者略歴

仲松弥秀 (なかまつ やしゅう)

1908年 沖繩県に生まれる。

1930年 沖繩師範専攻科卒業。

1938年 文検地理科合格。

その後、沖繩女子師範、朝鮮大
学師範、戦後は愛知県・東京都の
公立学校で教鞭をとる。

1959年 琉球大学助教授、のちに教
授となる (文化地理学)。

1975年 琉球大学退職。

現 在 南島地名研究センター代表。

琉球大学・沖繩国際大学講師。

著 書 『神と村』 (伝統と現代社)

『古層の村』 (沖繩タイムス社)

『うるまの島の古層』 泉社

神と村

1990年7月1日・第1刷発行

1997年10月1日・第2刷発行

著者＝仲松弥秀

発行者＝林利幸

発行所＝泉 ぷくろら 社

〒113 東京都文京区本郷2-6-12本郷マンション203号

振替・00140-1-413348番 電話 03(3812)1654

発売＝株式会社新泉社

〒113 東京都文京区本郷2-5-12

振替・00170-4-160936番 電話 03(3815)1662 FAX 03(3815)1422

印刷・長野印刷

製本・並木製本